平成30年４月１日発行（毎月１日発行）

２０１８．４
（公社）富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

４号
第４０巻
No.345

シキミ　*Illicium anisatim* L.　（シキミ科　*Illiciaceae*）

生薬　キキョウ

生　薬　モウソウジツ（莽草実）　秋に熟するので採取し、そのまま乾燥すると袋果は開裂し種子を外にはじき出す。褐色星状で先端部が尖り、強い香りを持つ。

成　分　有毒成分：anisatin, neoanisatin, dioxyanisatin、精油：safrol, eugenol, cineol 等。

効　能　過去に香料の原料として栽培された。葉や種皮を線香や抹香の原料とする。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター
村上守一氏　写真撮影

○○表紙について○○

『眞俗佛事編』（1728）に「榕の実は本天竺来れり。本邦へは鑑真和尚の請来なり。其形天竺無熱池の青蓮華に似たり。故に此を取て佛に供すると云。供物義云」とあり、インドから来て、中国に渡り、鑑真和尚（688－763）の手によって日本に渡来したと記されていますが、実際にはインドにシキミの自生は無く、青蓮華なるものは「木榕」のことで榕とは異なります。

実際にシキミは日本の暖帯、本州（宮城･石川県以南）、四国、九州、沖縄や済州島、中国に自生し、国内の洪積世（250万年－１万年前）の土壌から種子が見つかっていることから広い地域に分布していたものと考えられています。常緑の小高木で高さ10ｍにも達し、胸高直径30cmにもなります。材は緻密でろくろ細工、寄木細工、象嵌、念珠鉛筆などに用いられます。葉は互生し、長楕円形から狭倒卵形、上面は光沢があり、やや厚く、芳香があります。花は淡黄緑白色、枝の上部の葉腋から１個ずつ出て、花被片は10－15、花弁はやや細く、広線形。果実は９－10月頃に熟し、淡緑色で車座に集まります。葉、樹皮、果実に毒成分を含有しますが、特に果実は毒性が強いことから「悪しき実」が転じてシキミとなったと言われています。また、果実には精油が多く、香りが強いことから「臭き実」から転訛したとも言われています。

鑑真和尚の渡航から間もないころの『万葉集』（783）に「奥山の榕が花の名のごとやしくしく君に恋ひわたりなむ」（大原真人今城）と詠まれていることからも国内自生種と考えられます。「愛宕山榕ヶ原は雪積もり花つむひとの跡たにもなし」（曽禰好忠・平安中期の歌人）とも詠まれています。榕ヶ原は右京区の宕陰地区にあり、シキミの名所であったようで、現在でも愛宕神社では境内でシキミが売られ、サカキ（***Cleyera japonica***）の代わりに神事にシキミを使っています。

神事に榊と同様に使われたと思われる榕が、仏事に使われるようになったのはいつの頃かははっきりしませんが、『枕草子』（平安中期）の一二四段に「正月に寺に籠りたるはいみじく寒く、雪がちにこほりたるこそをかしけれ。…帯うちかけて拝み奉るに、（ここにかうさぶらふ）といひて、榕の枝を折りて持てきたるなどの尊きなども猶をかし」とあることからこの頃から用いられ始めたともいわれています。現在でもシキミが自生する西日本では使っているようです。

中国名の莽草が和名のシキミにあたることは『神農本草経』や『名医別録』（502－536）でははっきりしませんが、日本の本草書の『本草和名』（918）には「莽草　和名之岐美乃木」、『和名抄』（934）にも「莽草　和名之木美」と。江戸時代になっても『多識編』（1612）に「莽草　志岐美」としています。『大和本草』（1709）には寇宗奭（1116本草衍義刊行）の説を取り入れ、莽草が和名のシキミであることを詳しく説明していますが断定はせず、「莽草と別物なりや、いぶかし」とも言っています。『本草綱目啓蒙』（1803）には「莽草　山中に多し。寺院にも栽ゆ、大木なり。葉互生す。楊桐の葉より狭長にして厚く、肌美し冬凋まず。切れば臭気多し三四月花を開く大さ一寸許、七八弁、小蓮華の状の如し。白色にして微く黄を帯う。蝋花の如し。後実を結ぶ。大茴香の形に似たれども香気大に異なり。薬肆に此実を大茴香に雑て偽る。然ども毒あり」と莽草とシキミを同一と言っています。ここで言う大茴香は中国広西チワン族自治区南部からベトナム北部に自生し、栽培されるトウシキミ（***I. verum***）の果実で、star anise、八角茴香とも言われ、星状でシキミの果実とよく似ています。星の先端部が尖らないことや無毒であるところがシキミの果実と異なるところで、香辛料、芳香性健胃剤として用いられています。また、成分のシキミ酸から抗ウイルス剤のタミフルが合成されたことでも知られています。　（村上守一　記）